

掲載コンテンツのご紹介

平成27年度に追加しました、20本の地域映像の概要をご紹介します。
 実際の映像は「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業ポータルサイト」にてご覧頂けます。



ほっかいどう しゃこたんちよう ぶし ふるさと ほうじよう うみ ひび にしんぼおんど
北海道 積丹町ソーラン節の故郷「豊穡の海に響け！ 鯨場音頭」

北海道の西部に日本海につかだした積丹岬がある。ここに以前は大量の「鯨(にしん)」が押し寄せてきた。人々は鯨を獲ることで一時代を築いたが、その際に漁労歌として唄われたのが「鯨場(にしんば)音頭」である。漁労の作業に合わせ4つの音頭が唄われた。「船漕ぎ音頭」港から漕ぎ出すときに唄われた。「網起し音頭」鯨を網から枠網に落とすときに唄われた。「沖揚げ音頭」港で鯨を陸揚げするときに唄われた。「子叩き音頭」網から鯨の子をたたき落とすときに唄った。現在でも祝い事などで披露されるが「積丹町鯨場音頭保存会」による。また当地には「美国(びくに)神社」「神威(かむい)神社」が御座されているが、その例大祭では郷土芸能や神事が行われている。神輿行列、獅子舞、海上渡御等が行われて海上安全、漁業繁栄が祈られる。



いわてけん いちのへまち にのへ ちほう うるしろう
岩手県 一戸町 「二戸地方の漆蠟づくり」

岩手県二戸(にのへ)地方は二戸市浄法寺町(じょうほうじまち)を中心とする漆液(生漆)の産地として漆器(浄法寺塗)が知られているが、かつては漆の実から蠟(ろう)を盛んに生産していた地方でもある。この地方の漆蠟(うるしろう)の中心地は一戸町(いちのへまち)(一戸・西法寺・姉帯・小鳥谷)と二戸市(福岡・金田一)であり、漆液が採れる地域で漆蠟も生産していたということではない。漆の実を秋から冬に収穫し、それを臼で搗いた後、篩(ふるい)にかけて種と蠟分を含む果肉部分を選別し、夏の暑い時期に果肉部分を蒸した後、強く搾る(しぼる)ことにより蠟を得ていた。江戸時代初期には盛岡藩の重要な産物として藩が統制しており、水力発電が行われ新しい照明の時代が到来する大正時代末期まで長年に亘り二戸(にのへ)地方の代表的な産物であった。この漆蠟を原料にして蠟燭(ろうそく)が作られていたのだが、生産される漆蠟の大部分は塊のまま会津など他地方へ移出されており、会津地方では二戸地方で生産した漆蠟は良質であると高く評価されていた。



とちぎけん しおやちよう かざみ だいたいかぐら けんしてい むけい みんぞく ぶんかざい
栃木県塩谷町 「風見太々神楽」 <県指定 無形 民俗 文化財>

毎年4月第一日曜日、東護(とうご)神社に太々岩戸神楽が奉納される。この神楽は元和(げんな)2年(1616)に始められたといわれ、代々の神官によって伝えられてきたが大正6年(1917)に、神官から氏子の長男に継承されることになり今日に至っている。明治の頃、一時中断したが、村に悪疫が蔓延し、それを退散させるため明治23年(1890)再興された。演目は全36座であるが、現在ではその内6座が舞われている。第1座「総礼(そうれい)の舞」四方を清め舞の無事終了を祈る。第6座「往還住命(おうかんすみのみこと)舞」、第16座「天安河原(あめのやすはら)の舞」剣、勾玉、鏡を創る舞。第20座「岩戸(いわと)の舞」天照大神が岩戸に隠れ、世の中が暗くなった。手力男(たじからお)命が大岩の扉を開けるとい舞。第28座「須佐之男(すさのお)命舞」お馴染の大蛇退治の舞。第35座「恵比寿(えびす)の舞」恵比寿様が鯛を釣り上げ、家内安全、世界平和を祈る舞。舞は「風見太々神楽保存会」によって舞われる



さいたまけん ふかやし うわのだい ししまい し してい むけい みんぞく ぶんかざい
埼玉県 深谷市 「上野台獅子舞」 <市指定 無形 民俗 文化財>

毎年10月に上野台八幡神社の秋の大祭に奉納される獅子舞である。始まりについての詳細は不明であるが、宝永2年(1705年)に上野台鎮守八幡神社の祭礼で、神前に奉納演舞がされた記録があり、少なくとも300年以上の歴史を持つ由緒ある獅子舞であるといえる。

獅子舞は「法眼(ほうがん)」「男獅子(おじし)」「女獅子(めじし)」で構成され、子供獅子舞である。演目は次の9つとなっている。「御幣掛(おんべかかり)」「弓掛」「花掛」「つな掛」「へらざさら」「いかえり」「はねかえり」「ばちかつぎ」「女獅子かくし」。お囃子は笛のみで舞い、棒使いの演舞も行われる。他に当地の神輿についても紹介があり、初日、光厳寺門前において、神輿の前で子供獅子舞、棒使いが奉納されて祭りが始動する。5基の神輿は一日を掛けて地区内を巡り、夜には八幡神社に納められる。



さいたまけん あさかし わぎし の うたい し してい むけい みんぞく ぶんかざい
埼玉県 朝霞市「根岸野謡」 <市指定 無形 民俗文化財>

「謡(うたい)は本来能の声学の部分を使う。「謡」はそれ自体に独特の台詞回しや節が付加されており、舞やお囃子がなくても、独立した芸能として鑑賞することがため、やがて素謡(すうたい)として、身分に関係なく能舞台以外の処で盛んに行われるようになった。根岸野謡は、朝霞市根岸台地区に伝わる謡である。地元では「ノウタイ」と呼ばれてきた。その始まりは、明らかではないが、代々農家の長男に伝えられ、能の謡とは異なる独特の節回しを持っているといわれている。野謡は、昔から正月などの年中行事、宮参りや結婚式などの人生の節目の祝いの席、棟上式や引越しなどの祝いの席で歌われた。特に祝いの宴席では、最初に野謡が歌われ、それが済まないうちは、他の歌を歌うことは禁止されていた。また、足を崩すこともお酒を飲むこともできなかったそうである。戦前頃までは、祝い事で披露されていたそうだが、戦後歌われる機会が減り、それを憂いた人々により昭和38年に保存会が結成され、現在まで継承されてきた。昭和50年には、朝霞市を代表する民俗芸能であることから、朝霞市指定無形文化財に指定されている。



ながのけん いいだし いいだし やまもと ななくり じんじや はだかまつ
長野県 飯田市 飯田市山本「七久里神社の裸祭り」

飯田市山本の七久里神社では、毎年9月20日前後の土曜日に行われる秋季祭典の宵祭り、勇壮な花火が奉納される。山本地区には7つの集落「平(たいら)」「大明神平・北平・東平・中平・西平・南平・湯川平」がある。それぞれに大旗を振り、高張提灯や行灯を捧げ、模擬花火筒や模擬玉箱を担ぎそして裸姿の腰に注連縄を巻いた力自慢の若者が桶を振りながら元気よく神社に練りこむ。拝殿で神主のお誂いを受け、神前の火をいただく、境内に組み立てておいた各平の「出壁(だし)」とよばれる囲いに入る。ここを休憩所にして、かつてはここで自分たちで作った手造り花火を打ち上げた。仕掛け花火の最後は庭の中央に立てた柱の頂きに結え付けた筒煙火「大三国(だいさんごく)」となる。その降り注ぐ火の粉を浴びながら、若者たちが桶振りをする。この祭りは、手造り花火の伝統に、江戸火消しの所作や草相撲の格好を獲りこみ、日露戦役の高揚感を伝えながら、風流化して出来あがった祭りといえる。



ながのけん すざかし たかなし じんじや あきまつ たかなし だいたいかがらのうち たかなし
長野県 須坂市「高梨神社の秋祭り」「高梨太々神楽の内」「高梨の牛獅子」 <市指定 無形 民俗文化財>

須坂市の高梨(たかなし)神社の秋祭りには、この地に伝わる「高梨太々神楽(たかなしだいたいかがら)」が奉納される。祭りは公会堂での「宿舞い(やどまい)」で幕を開ける。祭り行列は高梨神社に到着すると、鳥居の注連縄を切る「メ切り(しめきり)」が行われる。神殿の前に、3間半四方の「浜床(はまゆか)」といわれる舞台が特設され、氏子一同神前で礼拝した後、8演目の神楽舞が奉納される。「神獅子(しんじし)」、「鍾馗(しょうき)」、「お三輪(おみわ)」、「おかめ」、「久寿の葉(くずのは)」、「鬼(おに)」、「清姫(きよひめ)」、「牛獅子(うしじし)」の順に行われる。「牛獅子」は須坂市指定無形民俗文化財に指定されているように、この地域では大変特色のあるものとされている。神社を出た祭り行列は、「道祖神(どうそじん)」の前で、「丹波与作(たんばよさく)」を演じ、区長宅と氏子総代長宅で「礼舞(れいまい)」を舞って終了となる。一般的イメージとして、「神楽」、「獅子舞」、「狂言」を一体化したような伝統芸能である。



ながのけん さかえむら ぶんか けいしやう さかえむら かぐら
長野県 栄村「文化の継承」栄村の神楽

栄村は長野県の最も北の奥に位置し、新潟県の松之山と接している。当地には室町時代から続くといわれる神楽が伝えられ、この神楽は二人立ちの獅子舞が基本とされる。当時「伊、勢の大神楽」は、全国いたるところで行われたが、その影響を受けたともいわれる。明治時代初期の神仏分離以降、現在に近い形の神楽が始まったとされる。一方、明治から大正にかけて隣の松之山の神楽が最も盛んだったことから、その影響を受けたともいわれている。栄村では、人口の減少に伴い、集落毎に行われる神楽を相互に助け合い、盛り立ててきたが、助け合いの中で、その際影響を受けて帰ったり、あるいは入り婿によって持ちこまれたりしながら、少しずつ集落ごとに異なる「舞」になったのではないかとされている。演目としては、「油単舞(よたんまい)」、「御幣舞(ごへいまい)」、「サイトリ舞」、「天狗の舞」、「天狗の道きり」、「シメキリ(結界の注連宇を切る)」、「天狗と獅子の舞」等が伝えられている。



おかやまけん かさおかし かさおかしな い でんとうてき ほんおど おおしま かさおど
岡山県 笠岡市 「笠岡市内の伝統的な盆踊り」「大島の傘踊り」
 <県指定重要無形民俗文化財>

笠岡市内の各地位に伝わる伝統的な「盆踊り」のほぼすべてが、収録されている。中でも、「大島の傘踊り」は、新暦の8月14日の夜、2人1組となり、傘を刀に見立てて斬り合うように踊るのが特徴。「大島音頭」に合わせて「出踊り」「忍び」「斬り合い」の3種類の型を順に踊る。天正年間、大島の領主細川公は朝鮮征伐の後病死。1686年その法要の最中、突然雨となったので参列した遺臣たちは、供養踊りを刀の代わりに傘で踊ったといういわれがある。他に「水かえ踊り」(大井地区)、「ドンカッカラ節」(圃井地区)、「大黒踊り」(金浦地区)のほか、北川地区から笠岡諸島まで、市内各地区に伝わる盆踊りが紹介されている(国指定文化財を除く)。各地区ごとに少しずつ異なる盆踊りが次々に現れ、後世に貴重な記録を残すことになった。他にも昭和になって創られた盆踊り、平成になって創られた盆踊りなども収録されている。



おかやまけん せとうちし びげんやき おおがま さいげん
岡山県 瀬戸内市 「備前焼大窯の再現」

明治以降、陶芸家は個人宅に窯を作り、小型の焼き物を創るようになったが、小さな窯では「古備前の魅力」の謎解きはできないとして、中世の大窯焼成計画を立て、全長53メートルの大窯を建造、本編はその映像記録第4作である。第1作で53メートルの大窯を再現し、第2作で窯詰め焼成試験を行い、第3作では、一石の大甕を制作し、陶土の研究を果たした。本編はこれらの成果をもとに、「寒風(さぶかぜ)大窯」53メートルによる「試験窯詰め・焼成」実施計画に合わせた研究を行った過程を紹介している。一石大甕23個の他に四石大甕も創られ、その他作品と共に、窯内の配置を含む焼成の試験を行なおうとするものであった。平成23年正月4日「火入れ神事」が、取行われ、窯に火が入られた。46日目、約1,000度に達した。火入れから60日目、様々な努力と共に焼成が終了した。本編の記録はここまでであるが、第1作から通して映像を一覧することでより理解が深まる。



ながさきけん ひらどし
長崎県 平戸市
「的山流儀・花杖」「前平川畑流儀」「大根坂流儀・花杖」<市指定無形民俗文化財>
「大根坂ジャンガラ」<県指定無形民俗文化財>
「大島の須古踊り2」<国選択無形民俗文化財>

的山(あづち)大島では盆の時期、各地区でジャンガラ、須古踊(すこおどり)流儀(りゅうぎ)花杖(はなづえ)等の民俗芸能が、寺社や公共施設、新盆の家や墓で行われる。「ジャンガラ」は大根坂地区に伝わる念仏踊りを起源とする芸能で、スゲ笠と腰前に太鼓を付けた踊り手と、鉦たたき(共に男性)が、鉦のリズムに合わせて足を上げて踊る。簡素な笠の花飾りや、鉦たたきも踊る点など、17世紀初期頃には行われていた平戸島のジャンガラより古い要素が見られる。「須古踊」は的山、西宇戸、神浦地区で行われていたが、こんにち的山と神浦で継承されている。なお神浦では西神浦と東神浦が隔年交互で行っている。18世紀中頃には行われていた記録があるが、やはり念仏踊りに起源を持ち、着物にスゲ笠姿の踊り手(男性)が、円形に並び、笛の音に合わせてゆつくりと踊る。「流儀」「花杖」は的山、大根坂、前平地区に伝わる、棒や模造刀等を用いて行う武術の演技で、流儀は青年男子、花杖は子供の男子が行う。明治時代に北松浦半島や平戸から伝播したと考えられている。的山大島は盆の期間、島を挙げて様々な民俗芸能が行われる。「民俗芸能の宝庫」である。



くまもとけん たらぎまち たらぎまち でんしやう でんとうげいのう
熊本県 多良木町 多良木町に伝承される伝統芸能
 「いにしえからの心を継ぐ」

多良木町のある人吉・球磨地方では、「臼太鼓(うすだいこ)踊り」が有名である。臼太鼓を響かせながら悠然と舞う「頭(かしら)踊り」、鍬形や鹿の角を着けた「関(せき)」や「脇(わき)」が踊る。頭、関や脇の後ろをシャグマという長い毛のかぶり物を着けた子供が付き添い、鉦(かね)を打ち鳴らす。源平合戦を表すというこの踊りは勇壮さの中に何処か優雅さを有している。本編では「中原(なかばる)臼太鼓踊り」「伏間田(すまだ)臼太鼓踊り」「葛沢(かざらそお)臼太鼓踊り」「上槻木(かみつぎ)太鼓踊り」「東光寺(とうこうじ)臼太鼓踊り」が紹介されており、「他に、相良藩の武士が始めたといわれる「球磨拳(くまけん)」や、五穀豊穰・お祝い事などでおどられる「大久保棒踊り」が紹介されている。



くまもとけん いつきむら いつきむら つた きやうどげいのう
熊本県 五木村 「五木村に伝わる郷土芸能」
 ふるさとの心を守り、次代へ繋ぐ

五木村は、「五木の子守唄」で有名なところ、この地に「太鼓踊り」が古くから伝えられている。以下の五地区の太鼓踊り・棒踊りが紹介されているが、起源がそれぞれ異なることとされるのが興味深い。「田口(たぐち)の太鼓踊り」雨乞いや、五穀豊穰、盆の精霊送り等で踊られてきた。現在の演目は「うぐいす」のみとなった。「梶原(かじわら)地区」お囃子の鉦に天明三年(1782年)の銘があることからかなり古くから踊られてきた。現在は踊り手数名となってしまったが受け継がれている。「下谷(しもたに)地区」源平時代、戦場に赴く武士達の士気を鼓舞するために踊ったとされる。太鼓打ちの胃飾り3種あるのが興味深い。「高野の棒踊り」大正の始め八代から来た山師から習ったとされ、かつては神社の雨乞い踊りとして踊られた。現在は、小・中学校の子供たちにも指導し、運動会などでも踊っている。「瀬目(せめ)の棒踊り」1700年代に鹿児島から来た鉦夫から習い覚えたこととされる。どの地域においても、踊り手の人数減により、女性も子供も参加して次代への継承を図ろうとしている。



おおいたけん おおいたし のつはるまち おかくらかぐら おおいたし むけい みんぞぶんかざい
大分県 大分市 野津原町 「岡倉神楽」大分市無形民俗文化財

大分市野津原町岡倉地区には、明治初期の頃から神楽が伝わる。「岡倉神楽」である。毎年4月第一日曜日には、地域の神社に奉納される。現在17の演目があるとされるが本編では以下5演目が収録されている。「神避(かむやらい)」神の国で須佐之男命が悪さをし、為に天照大神は岩戸に隠れてしまわれた。罰として須佐之男命が神の国を追放される場面を演じたもの。「大蛇退治(おろちたいじ)」須佐之男命が出雲で八岐大蛇(やまたのおろち)と戦い、酒を飲ませて弱らせ勝利を得、生贄だった櫛名田比賣(くしなだひめ)を助ける場面を演じたもの。「天孫降臨(てんそんこうりん)」天照大神(あまてらすおおみかみ)の子邇邇彦命(ににぎのみこと)が神の国から降りる途中で猿田彦命(さるたひこのみこと)に出遭うが、その形相に驚き恐れた一行の誤解を解いたのが天宇受賣命(あめのうずめのみこと)。「貴弦城(きげんじょう)」海幸彦と山幸彦のお話である。お互いに得意とする道具を交換するが、山幸彦が釣り針をなくし、困っていたところ海の神の「塩槌翁(しおつちのおきな)」がこれを助ける話。「綱切り(つなきり)」牛馬の安全、五穀豊穰を祈念する一人舞。四方の神々に祈り、最後に注連縄を切る。



かごしまけん おおしまぐん とくのしま いせんちやう しまうた いなさくかんれんでんとうぎやうじ
鹿児島県 大島郡 徳之島 伊仙町 「島唄と稲作関連伝統行事」

この地域では、昭和40年頃まで水田が至るところ広がっていた。今はほとんど無くなってしまったが、島には稲作に関する伝統芸能が残されている。主なものに、唄名「畦越の水(あぶしくえぬみじ)」(田んぼに畦を作り、水を引く様子を歌ったうた)。唄名「タンクサカキ(田の草かき)」田の草を手で搔いて取るといううた)があり、田植唄と共通的な歌詞も多くみられる。唄名「田植唄」とは、田植の際に田植衆を励ますために歌われるもので、畦の上に並んだお囃子連がうたを歌い太鼓を打ち、田の中では田植衆が横一線に並び力を合わせて苗を植える。唄名「作たぬ米節(ちくたぬめぶし)」は、田植えが終わって稲が少し伸びた頃、風にたなびく青々とした苗の様子を歌ったうたである。苗が実り、収穫の時には稲刈り、ハサ掛け、脱穀が行われるが、使用されていた道具類は本土とほとんど同じものが使用された。道具類には、千刃、足踏み脱穀機、トウミ、電動脱穀機がある。唄名「稲摺り節(いねすりぶし)」では、伝統的な農作業の様子が演じられ、当時の農業を後世に伝える役割を果たしている。



かごしまけん おおしまぐん おきのえらぶじま ちな ちょう ちなちよう えら でんとうげいのう
 鹿児島県大島郡 沖永良部島 知名町 「知名町が選ぶ伝統芸能」

九州本島から552Km、沖縄本島から60Kmの奄美群島西南部に位置する。従って、琉球文化の影響を受けてきた。本編は島に伝わる伝統芸能を「知名町伝統芸能祭」を中心に伝えている。「正名(まさな)ヤッコ踊り」昭和初期のころまで、ヤッコ踊りは島内各集落で踊られていた。現在では、正名集落他ごく一部でしか見られない。「下平川(しもひらかわ)棒踊り」一時期途絶えていたが、下平川中学校の有志が再興したという。「久志検(くしけん)チンカラ踊り」約200年程前、久志検の旅人が、薩摩に亘り、その時に遭った踊りや、衣類、小道具等を持ち帰って始まったと伝える。「西目(にしみ)」イシシハカマ踊り江戸時代終末期、鹿児島に渡った沖野松盛が歌を持ち帰り、それに三味線・踊りを取り入れ完成させたといわれている。「瀬利覚(せりかく)獅子舞」古くは、中国大陸から沖縄本島へ、そして本島に伝えられたといわれる。獅子の形、所作がよく似ていると評される。「上平川(かみひらかわ)大蛇踊り」空中に吊り下げられた大蛇を、所々に付けられた紐を操ってうねり踊らせる大変ユニークで見ごたえのある伝統芸能である。



おきなわけん おきなわし うえちく うえち おきなわけん おきなわし うえちきよ
 沖縄県沖縄市 上地区 「上地のウステーク」 沖縄県 沖縄市 上地
 うゆうかい
 郷友会

沖縄市上地区では、例年、旧暦9月に「ウシデーク」が行われる。「ウシデーク」とは元々は臼太鼓のことで、この臼太鼓を伴奏に、主に主婦が中心になって、唄いながら踊る行事で、国王の賛歌とも、また五穀豊穡、無病息災を祈る歌舞とも言われている。昔は沖縄県内の各地でみられたが最近では、ごく限られた地域のみとなっている。この上地区でのウシデークは、首里節、散山節、石根節、坂本節、恩納節、久高節、クワディーサ節、出羽節が踊られている。



おきなわけん なんじょうし ごこく はっしょう ち なんじょう ほうじょう いの
 沖縄県 南城市 「五穀発祥の地・南城」～豊穡への祈り～
 なんじょうしむけい ぶんかざい
 <南城市無形文化財>

大里古堅区(おおざとふるげんく)の「ミーミンメー」旧暦4月1日に行われる豊年祭で、子孫繁栄と豊作を祈る。子供達が「ミーミンメー」を踊り、ミルク(弥勒)の福を授かる。佐敷外間区(さしきほままく)の「ミルク」ミルク(弥勒)は海の彼方から五穀豊穡をもたらす神である。「ヌーバレー」は、ミルクの神を迎える「世界報」(ユガフー)を行い、集落を巡る行事である。佐敷津波古区(さしきつはこく)では旧盆の後に、「ヌーバレー」が行われ、無病息災と五穀豊穡を祈り、皆で伝統芸能を楽しむ行事を行う。知念知名区(ちねんちなく)当地区のヌーバレーは200年の歴史を有し、南城では最大規模のもの。戦争の無縁仏を慰めるのも一つの役割である。玉城百名区(たまぐすくひやくなく)旧暦の8月10日「生りぬ御拜(うまりぬうがん)」が行われる。その年に生まれた子供達の健康と区民の無病息災を祈る。「稲摺節(いにしりぶし)」が稲作発祥の地として受け継がれている。玉城前川区(たまぐすくまえかわく)地域では「敬老会」が行われ、「繁盛節(はんじょうぶし)」や「稲摺節」で老いも若きも盛り上がる。玉城仲村渠(たまぐすくなかんだかりく)旧暦の初午の日に「親田御願(うえーだーうがん)」が行われ、稲作渡来の儀式として残されている。この後、各地で田植えが始まる。



おきなわけん よみたんそん たかしほ なんまめー
 沖縄県 読谷村 「高志保馬舞」

17世紀、まだ琉球と呼ばれていた頃の高志保村には、門外不出の芸能があった。9月の敬老会と新年恒例の合同生年祝(とうしびーすーじ)で、数え25歳の青年は「馬舞」を披露しなければならない。これは高志保の男性のみが演じる伝統の行事である。高志保にはいくつかの伝統的な家宝がある。「読谷山花織(ゆんたんざはなうい)」14世紀後半に南方より伝えられたという織物である。高志保出身の与那嶺貞さんが試行錯誤の上蘇らせ、1975年沖縄県無形文化財に、また1999年には人間国宝に認定された。もうひとつの宝「馬舞(なんまめー)」は400年の伝統を持つが次第に型が崩れるなど保存がややぶまれ、1983年に「高志保馬舞保存会」が発足、今日まで保存継承に力を注いできた。馬舞に関する音曲として「馬舞節(なんまめーぶし)」「馬舞揚節(なんまめーあぎぶし)」等4曲がある。馬乗りを演じる馬舞者は、力強く囃子(へーし)をかけながら手綱をさばき、時にはユーモラスな馬のさまざまな所作をまねる。太鼓打ちの高く振り上げた足で、太鼓を連打する技は圧巻である。



おきなわけん やえせちよう あざしたはく しーしがなし しず むら
沖縄県 八重瀬町字志多伯 「獅子加那志の鎮まれる村」

村の守り神である「獅子加那志(しーしがなし)」は、大戦中に失ってしまったが、1946年デイゴの木から創られ蘇った。獅子加那志は年忌の8月の十五夜に現れ、五穀豊穰・無病息災を祈る。獅子加那志の年忌祈願は人のそれと同じく、一年忌、三年忌…三十三年忌となる。八重瀬町志多伯では平成23年8月の十五夜に「三十三年忌獅子加那志豊年祭」が行われた。宵になると棒踊「舞方」から始まって、次々に村人の芝居が始まる。狂言、舞踊、組踊など次々に披露される。やがて夜も更ける頃、獅子加那志があらわれ名残を惜しみながら豊年祭はお開きとなり、獅子加那志は「獅子屋」に戻り眠りに就く。